円珍『辟支仏義集』における『円悟』の引用について

——法宝以後に活躍した辯空法師とその学系——

村上明也

問題の所在

「仏性論争」や「一三権実論争（三一権実論争）」などという語は、とりわけ玄奘三蔵（六〇二—六六四）における新訳唯識経論の訳出に端を発し、中国唐代から日本中世に至るまでの東アジア圏全体を巻き込んだ、極めて広汎で複雑な言葉である。[1] その範囲を日本に限ってみると、有名なところでは、最澄（七六七—八二二）と徳一（?—八二一〜八四二?）の論争、源信（九四二—一〇一七）『一乗要決』（一〇〇六）などを挙げることができるが、この令名を馳せた人物やその著述でさえ、資料の不足や内容の難解さも手伝って、いまだ全体を見通す研究にまでは至っていない。

本稿で注目する智証大師円珍（八一四—八九一）の『辟支仏義集』二巻もまた、その重要性についてはしばしば言及されてきた。[2] しかし、殊更に本書を取り上げて研究を試みたものはそれほど多くない。その理由は様々に考えられるが、以下に述べることもまた『辟支仏義集』に関する研究が立ち後れてきた要因の一つと思われる。すなわち、『辟支仏義集』は三乗の中の「辟支仏」だけに焦点を当てたものであるから、本書がいくら最澄・徳一における論争を引き継いでいるとはいえ、[3] 一乗と三乗・五姓（性）各別・仏性などといった中心思想の解明が

見込めない。

しかしながら、八十八篇ほどの諸経論疏の引用からなる『辟支仏義集』には、すでに散逸して披閲することのできない書目が多数確認される。また、不現存資料の特定や逸文の分析を通して最澄・徳一の論争に立ち帰ったり、④『法華論記』に引用される未詳文献を手掛かりとして円珍独自の思想的な特徴を指摘した研究成果⑤もあるため、『辟支仏義集』所引の典籍を調査することは極めて重要であると思われる。

本稿では、『辟支仏義集』所引の『円悟』に注目して、その書名や撰者などについて考察を加える。

一 『辟支仏義集』所引の『円悟』と『法華円鏡』

『辟支仏義集』の下巻には『円悟』なる書が二度にわたって引用されている。一度目の引用箇所の冒頭では以下のような注記がみられる。

円悟(マヽ)⑥一云　考イ本注云、東域録云二円鏡七巻一、恐是歟　（旧仏全一二六・六三七下）

これに対する大久保良順先生の見解は以下の通りである。⑦

智証大師は辟支仏義集下巻に、「円悟一云」「円悟四云」の二章を挙げ、仏教全書本では「イ本注云東域録云円鏡七巻恐是歟」と注記しているが、恐らく円鏡と見てよいのであろう。

大久保先生は『大日本仏教全書』の校注を論拠として、『辟支仏義集』下巻に二回引用される『円悟』を散逸文献『円鏡』であると推定する。

この校注に指摘されるように、『円鏡』は永超（一〇一四―一〇九五）の『東域伝灯目録』（一〇九四）に次のようにある。

法華部⑧

同経銷文略疏三巻（天長寺延秀集解）

同円鏡七巻

同円鏡樞決一巻（同上）

同円鏡釈文十巻（見行本六巻。同上与二円鏡七巻一可レ対レ検之。）天台円仁巡礼記云、就二揚州延光寺伝恵一覓得法華円鏡三巻一云云。可レ尋レ之）（大正五五・一一四九下）

これによると、天長寺の延秀（生没年不詳）には『法華経銷文略疏』三巻などの著述があったようである。⑪しかしながら、これらはすべて散逸して伝わらない。

どうして『法華円鏡』の撰者が延秀であるかというと、荊渓湛然（七一一―七八二）の『法華文句記』（七七四―七七七）の巻第一〇下には次のようにあるからである。

近見二秀公法華円鏡一広立二難勢一不レ越二先規一。今攅二旧聞一兼資二後見一。（大正三四・三五〇中）

湛然は『法華円鏡』の著者を「秀公」、つまりは延秀と見なしていたと考えられる。

ところで、『法華円鏡』の本文については湛然門下の著述にしばしば引用される。⑫一例を挙げれば、次の如くである。

道邃『法華文句補正記』巻第五

大九無譬者、円鏡云、大経云為二利根人一説二大乗九部一略二於譬喩一即其事也。（新卍続一八・七一二下）

智度『法華経疏義纘』巻第四

有云、大九者、出二円鏡疏一。凡言二有云一者、皆是円鏡疏延秀法師釈也。（新卍続二九・六五上）

ここは、湛然の『法華文句記』巻第五下にある「第九無譬」[13]という語を注釈する一段であり、道暹（生没年不詳）『法華文句輔正記』や智度（生没年不詳）『法華経疏義纘』[14]には「円鏡云」「円鏡疏」「延秀法師」という語がみられる。[15]

特に道暹の『法華文句輔正記』には、「円鏡云（ニ ク）」とあるだけでも二十二回の使用があり、それらに基づいて『法華円鏡』の本文を部分的に復元することができる。[16]

その中でも興味深いのは、道暹所引の『法華円鏡』が嘉祥大師吉蔵（五四九―六二三）の『法華義疏』（五八九―五九七）と本文的に一致するということである。[17]

道暹『法華文句輔正記』巻第三[18]

有人立四句者、円鏡云、問、実是六十小劫、云何令如食頃耶。答、長若定長、不可促之令短。短若定短、不可延之令長。夫長短量、以長短無定。所以能将長作短以短為長。何者因短故長。長名短長。由長故短。短名長短。非短非短短長非長、而能長短。非長即六十是食頃。非短即食頃、是六十於仏説法辺能以短為長。於聴法辺猶以長為短。将知、説之与聴倶是解脱之力也。

道暹『法華文句輔正記』巻第五[20]

大九無譬者、円鏡云、大経云、為利根人説大乗九部、略於譬喩。即其事也。

吉蔵『法華義疏』巻第二[19]

問、実是六十小劫、云何能令如食頃耶。答、長若定長、不可促長令短。短若定短、不可延短使長。以長短無有定性、因短故長。長名短長。由長故短。短名長短。以長名短長故、長可為短。以短名長短、短可為長。所以然者、以道既無二、即長短不二。不二即長短無礙。可得促長為短也。

吉蔵『法華義疏』巻第五[21]

故涅槃経云、乃為利根人説大乗九部経、略於譬喩。即其事也。

道遥『法華文句輔正記』巻第五[22]

有云、至多門者、円鏡云、来意門者、此経又雖七軸、宗帰一乗。但入此乗、有種種門。或従法説門入、或従譬喩説門入、或従因縁門入。即其相也。

道遥『法華文句輔正記』巻第一〇[24]

亦有人云、三灾等者、円鏡云、無情有三、火水風。有情亦三、身命財。無情三、次第有二。一従急至緩、二従小至大、三災小大也。有情難次第亦二。一従重至軽、故前命、次身、後財。二従難至易、以命難難勉、乃至財難易脱也云云。

道遥『法華文句輔正記』巻第一〇[26]

有人云、仏法二門者、円鏡云、一平等門者、如妙音得普現色身三昧、八万四千菩薩共得此定也。二不等門者、六十二億実与観音等、欲令人尊重観音故、於等作不等説。例如称揚諸仏経説。礼宝明仏、正滅十二劫生死罪、礼拘留孫仏、滅無量劫罪也。

一見して明らかなように、道遥『法華文句輔正記』に引かれる『法華円鏡』の逸文は、吉蔵の『法華義疏』と密接な関連をもっている。[28] しかし、吉蔵以前に『法華円鏡』なる文献があったと伝える史資料は存在しないので、

吉蔵『法華義疏』巻第五[23]

所以有此品来者、斯経文雖七軸、宗帰平等大慧。但入此大慧、有種種門。或従法説門入、或従譬説門入、或従亦法亦譬門入。若因此三門悟入大慧、則三種是門。若因此三門不得悟入、則三種非門。

吉蔵『法華義疏』巻第一二[25]

就此二難、各開為三。無情三者、謂火水風。有情三者、謂命身財。無情三、有二種次第。一従急至緩、二依三災次第従小以至大也。有情難従重以至軽、故前命、次身、後財。二者、従難至易、以命難難免、乃至財難易脱也。

吉蔵『法華義疏』巻第一二[27]

一平等門、二不平等門。平等門者、如妙音得普現色身三昧、八万四千菩薩亦得是門。則妙音与諸菩薩平等門。供養持名平等無異。二者不平等門、六十二億実与観音等、今欲令人尊重観音故、於等作不等説之也。例如称揚諸仏経説。礼宝光明仏、止滅二十一劫生死之罪、礼拘留孫仏、却無量劫罪。

これは『法華円鏡』の撰者延秀が吉蔵『法華義疏』の本文を参照したと考えるのが自然であろう。[29]

また、はじめに挙げた対照表上段の問答をみれば、『法華円鏡』は『法華経』「序品」の「六十小劫」「如食頃」[30]について問いを設けていることが明らかである。

したがって、『法華円鏡』は『法華経』に関する論書とみて差し支えなかろう。

なお、『法華文句輔正記』所引の『法華円鏡』は敦煌出土のスタイン蒐集『法華経疏』（擬題）とも本文の一致が認められる。[31]

道暹『法華文句輔正記』巻第一〇[32]

経有想無想者、円鏡云、有想、謂有心而麤。無想、謂無心而寂。非有想悲無想、謂雖有心非麤非寂非麤故、異有想非寂故、異無想。十地論云、六趣者苦楽差別。四生依止、為別謂依業故。有形無形者、色無色差別。有想無想者、麤細差別。有足無足者、形想差別也。

これによれば、道暹の『法華文句輔正記』に引用される『法華円鏡』とスタイン蒐集『法華経疏』が本文的に関連することが明白である。

スタイン蒐集『法華経疏』[33]

体類者、即有想無想非有想非無想也。一切衆生以想為性。一有想、謂有心而麤。二無想、謂無心而寂。三非有想非無想、謂雖有心非麤非寂非麤故、異乎有想非寂故、異乎無想故、曰非有想非無想也。…中略…十地論云、六趣者苦楽差別。四生者、依止差別、依止業故。有形無形者、色無色差別。有想無想者、麤細差別。有足無足者、形相差別。如是等在衆生数者総結也。

ただし、本稿は円珍『辟支仏義集』所引の『円悟』を解明することに主眼を置くものなので、これ以上『法華円鏡』をめぐる問題に立ち入ることはしない。今後は道暹のみならず、智度などが引く「円鏡疏」「延秀法師」などの文言を調査し、湛然とその門下における『法華円鏡』の受容に関する総合的な研究が俟たれるところである。

ともかく、ここで筆者が強調しておきたいことは、『円鏡』は『法華経』に関する論書であるという一事実のみである。

これを踏まえた上で、次項では円珍『辟支仏義集』に引用される『円悟』について検討を加えたい。

二 『辟支仏義集』所引の『円悟』と慧遠『涅槃経義記』の関係

これまで考えられてきたように、『辟支仏義集』に引かれる『円悟』は『法華円鏡』と断定してもよいのであろうか。[34]

結論を先取りすれば、『円悟』は隋の三大法師の一人として著名な浄影寺慧遠（五二三―五九二）の『涅槃経義記』に対する注釈書と考えられる。

円珍『辟支仏義集』下巻[35]

円悟一云

若具論之、声聞種性速者、三生、遅六十劫。若縁覚性速経四生、遅須百劫。三生四生利鈍、皆得六十、百劫。必是利鈍以久修習皆成利故。若論成仏要、三祇耶速者、更経九十一劫。遅者、百劫修相方成。広如婆沙三十一、正理六十一説。値仏等者、此聞教也。問、要由値仏余六得耶。答、倶舎二十三云、遇仏出世殖此善根。有余師云、亦遇独覚、若悟道時、要由値仏。以縁覚人不説法故。准此若遇善説法人許亦応得。而得悟道者、此得果

慧遠『涅槃経義記』巻第一[36]

聖教万差。要唯有二。謂声聞蔵及菩薩蔵。教声聞法名声聞蔵。教菩薩法名菩薩蔵。声聞蔵中所教有二。一声聞声聞、二縁覚声聞。声聞声聞者、是人先来求声聞道。常楽観察四真諦法、成声聞性。於最後身、値仏為説四真諦法、而得悟道。本声聞性。今復聞声而得悟道。是故名曰声聞声聞。如経中説。求声聞者、

也。下明縁覚道者、此求果以縁。謂因縁覚者、是智従縁生、故名縁覚。因縁之理、是智所行名縁覚道。謂見諸法、但従縁生。自体既無。愛何所託。久習此見成縁覚性也。常楽等者、挙行理也。十二縁義師子広明此十二支。有仏無仏相常住。因果相続唯智所知。不可改変名為理也。…中略…於後等者、此聞教。已謂第四生或百劫満聞仏説也。而悟道者、此挙果也。…中略…従本縁覚等者、久習観縁成縁覚性。至果因教故号声聞。因名縁覚、果名声聞、因果合意名縁覚声聞。已結名訖。如経等者、法華第七応根海説故知小也。已上第二依名釈義。

円珍『辟支仏義集』下巻[37]

円悟四云

独一之行者、辟支有二。若部行者、部党而行同声聞説。此在人間。若独勝覚、非部党行。通在人天。如麟一角、不依師悟。第五人也。時無多劫[39]者、初果七生、二果一生、三果不還、皆得無学授無多也。経古定反直也。都通力強[40]者、経五停心或従

為説四諦。拠此為言。縁覚声聞者、是人本来求縁覚道。常楽観察十二縁法、於最後身、値仏為説十二縁法、而得悟道。本縁覚性。於最後身聞声悟道。是故名為縁覚声聞。如経中説。為求縁覚者説十二縁法。

慧遠『涅槃経義記』巻第四[38]

第四人中先総標挙、下弁其相。句別有五。一断結多少。永断三結、余処宣説断五上結。色無色染痴慢掉戯是其五也。二明所得。得阿羅漢是有為果。煩悩無余入涅槃者、是無為果。三簡異縁覚。仮師得度。不同辟支独一之行。四是名下結。五趣大遠近。問曰、須陀斯陀那含此之三人向無学果時無多校。何縁向大爾許階降。釈言、此等進至無学然後向大。所挍無多。若彼三人不求無学径向大者、心有残結、障道力強、道行難成。故有如此。又須陀等儻生上界方至無

煖等一座便起見。十六心見道、類智忍許属修道。修道一百六十心成独覚也。…後略

学。時亦不少。故按多劫。第五人中先総標挙。辟支有因道同羅漢、故不別論。又此利根一入聖道至果方出。中無出理、故不別説。…後略

これを見ても明らかなように、上段の『円悟』の本文に文字囲した部分は、すべて「～とは」として、下段で示した慧遠『涅槃経義記』の本文を注釈する形式をとる。

また、『円悟』の巻数は「一」と「四」であるが、これに相当する現行『涅槃経義記』の巻数も「巻第一」「巻第四」となっているので、両書とも巻数が一致するのは興味深い。

加えて、『円悟』には波線部の如く玄奘訳の『阿毘達磨倶舎論』（六五一―六五四）『阿毘達磨順正理論』（六五三―六五四）『阿毘達磨大毘婆沙論』（六五六―六五九）[41]が教証として出されている。ゆえに、『円悟』の成立年代は、玄奘入寂の［六六四］、確実なところでいえば『阿毘達磨大毘婆沙論』が訳出された［六五六―六五九］以降であることが分かる。

したがって、『辟支仏義集』所引の『円悟』は、おそらく慧遠『涅槃経義記』の注釈書であって、『法華経』と関連の深い『円鏡』ではない。

そこで、『智証大師請来目録』（八五九）を確認してみると、慧遠『涅槃経義記』の注釈書が我が国に将来されている。

大般涅槃経義記十巻（沢州）
涅槃疏科文一巻（沢州）
涅槃疏円指鈔十巻

（大正五五・一一〇五下）

なるほど、『智証大師請来目録』には沢州の「大般涅槃経義記」、つまり慧遠の『涅槃経義記』とその注釈書で

ある『涅槃疏円指鈔』が挙げられている。

なにゆえ、『涅槃疏円指鈔』が慧遠『涅槃経義記』の注釈書であるかというと、『辟支仏義集』（八八七）撰述の三年前にあたる元慶八（八八四）年、円仁が弟子の良勇に授けた『授決集』の巻上には『涅槃疏円指鈔』が以下のように取り上げられるからである。

今、天台疏（ノ）、拠（リテ）二此妙経一、決（シテ）為（ス）二八千一（ト）。冥同（シ）二正本一（ニ）。沢疏円指（モ）亦同（シ）二我疏一（カト）。（旧仏全二六・二五八上）

ここには「択疏（択州で出家した慧遠の疏）の円指」とあるから、慧遠の『疏』の『円指』は円珍自らが将来した『涅槃疏円指鈔』と考えられる。

また、内容面からいえば、円仁は『涅槃疏円指鈔』を自説の補強のために使用しており、「沢疏の円指」を好意的に取り扱っていることには注意しておく必要がある。

筆者も『授決集』の出典名が「円指」ではなく、「円指鈔」と表記されていれば次のように類推することはなかった。すなわち、ここに「鈔」の字が省略された「円指」という用例があるということは、『辟支仏義集』に引用された『涅槃経義記』の注釈書『円悟』は円珍将来の『円指』であった可能性が高い。

というのも、『円悟』の「悟」と『円指』の「指」の字は、意符が「忄」と「扌」、音符が「首」と「旨」となるので、我が国のくずし字において相当似通っている。よって、「悟」と「指」は魯魚の誤りと考えてよいのではなかろうか。

以上より、『辟支仏義集』所引の『円悟』は、『授決集』に引かれる『円指』とともに慧遠『涅槃経義記』の注釈書であること、写伝の過程で「指」が「悟」と誤写された可能性が高いことを最大の論拠として、『円悟』を円珍将来の『涅槃疏円指鈔』と推定したい。(42)

三　円珍将来の『円指鈔』と義天目録の『円旨鈔』について

『辟支仏義集』所引の『円惜』、つまり『涅槃疏円指鈔』の著者は、義天（一〇五五―一一〇一）の『海東有本現行録』[43]（一〇九〇）の巻第一によると、詧空なる人師の撰述書であると伝えられる。

大涅槃経

義記二十巻（或四十巻）　慧遠述

科四巻　亡名

円旨鈔十四巻科五巻　詧空述　（大正五五・一一六八上）

前掲した円珍将来のものが『涅槃疏円指鈔』十巻であるのに対し、『海東有本現行録』が伝えるのは「指」ではなく「旨」の『円旨鈔』十四巻（科五巻）となっているので、両書は書名と巻数において異なりがある。

まず書名の相違について述べておく。そもそも、「指」の字は「恉」「旨」と同声である。また、これが「趣旨」という意味を示す場合、古くは「指」と「旨」の字を用いることから、[44]書名が『円指鈔』『円旨鈔』『円恉鈔』とあっても、字面の相違が別書名を表す証拠にはならない。

次に巻数の異同に関しては、もともと十巻本（円珍将来）と十四巻本（義天目録）の二種の異本があって、後者が流布したのか、十巻本は十四巻本の一部であったのか、現在ではこれを知る手掛かりは全くない。[45]

また、撰者である「詧空」についても一言しておく必要がある。『宋高僧伝』（九八二―九八八）の巻第六「知玄（八〇九―八八一）伝」には以下のような記述がみられる。

年十一遂其削髮。乃随師詣唐興邑四安寺、授大経四十二巻、遠公義疏、辯空師円旨、共一百二十五万

言ヲ、皆嚢ニ括深奥ヲ一矣。（大正五〇・七四三中）

そもそも、『義天目録』に記載された「弁空」の「弁」の字は「弁」の譌字であり、「弁」や「弁」は「辯」の俗字である。ゆえに、傍線を引いた「辯空」と『海東有本現行録』に挙がる「弁空」は同一人物であると考えられる（以下、大正蔵などから文章を直接引用する以外は「辯空」の表記で統一）。

加えて、傍線部にある「円旨」は北本『涅槃経』四〇巻、『涅槃経後分』二巻、慧遠『涅槃経義記』の後に列ねられている。そうであるから、「円旨」は『涅槃経義記』の注釈書と考えるのが妥当であろう。

したがって、『海東有本現行録』に掲げられる『円旨鈔』とその撰者「辯空」は、『宋高僧伝』巻第六「知玄伝」によって正確な情報であることが知られる。

中国仏教史上、慧遠『涅槃経義記』の注釈書は、円珍将来の『涅槃疏円指鈔』と『海東有本現行録』記載の『円旨鈔』の二つしか存在しないので、『円指鈔』と『円旨鈔』はおそらく同一書目であったとみて問題ないのではなかろうか[66]。

かかる推測に誤りがないとすれば、『涅槃疏円指（旨）鈔』の撰者である辯空とは、一体如何なる人物であるのかが問題になる。玄奘滅後に活躍し、しかも伝統的に北本『涅槃経』を使用する北地系の人師となれば、その範囲もかなり絞られてくるが、そもそも「辯空」なる人物は『高僧伝』などの史資料に一人しか挙がっていない。それは般若三蔵（？―七八一～七九八―？）の『大乗理趣六波羅蜜多経』の訳場に参加し、そこで証義を務めた辯空である[67]。

「大乗理趣六波羅蜜多経序」には以下のようにある。

於レ是闍賓沙門般若受旨宣揚シ、光宅寺沙門利言為ニ之翻訳ス一。時ノ大徳ニハチリ則有ニ資聖寺道液ノ、醴泉寺超悟ノ、慈恩寺応真ノ、荘厳寺円照ノ、光宅寺道岸ノ、西明寺円照ノ、章敬寺弁空ノ、西明寺良秀等ニ。法門領袖ナリ、人中龍象ナリ。証ニ明シ正義ヲ一、

輝ニ潤玄文一。知ニ釈迦之宝城一、識ニ衆尊之満字一。（大正八・八六五中）

これによれば、辯空は般若の訳場（七八八）[48]で証義を務めた人師であることが分かる。よって、北本『涅槃経』を注釈する慧遠『涅槃経義記』に、再度注釈を加えて『涅槃疏円指鈔』を著した辯空と、玄奘滅後の長安仏教界、特に般若の訳場で証義に充たった辯空は、地理的にも年代的にも同一人物と考えるのが最も妥当な見解といえる。

四　辯空（？～七八八～？）の学系について

最後に辯空の学系について検討を加えてみたい。

そもそも、円珍の『辟支仏義集』は一三権実論争史の上に位置付けられる書物である。よって、そこに集録される要文は、すべて円珍自身が好意的に捉えたものであり、『涅槃疏円指鈔』もまた同様の趣旨で引用されたと考えられる。

ここで注目したいのは、『辟支仏義集』所引の『涅槃疏円指鈔』が法宝の『一乗仏性究竟論』[49]（六九五―六九九）[50]を書名も掲げずに引用していることである。

周知の通り、法宝の『一乗仏性究竟論』は、玄奘の新訳唯識経論とそれに依拠する人師を意識しながら、『法華経』『涅槃経』の一乗仏性義を根本に据えて、一切皆成・一乗真実を主張した文献である。

多数の経論を印度より将来した玄奘は、帰国後すぐに太宗（在位六二九―六四九）の庇護を受けて訳出を開始したが、『仏地経論』（六四九）などが翻訳されると、そこには唯識の五姓各別説が示されているので、玄奘の訳場に加わっていた涅槃学派の霊潤より批判が起こった。これに応えたのが、唯識学派の神泰（生没年不詳）であ

り、以後、人物および思想的な範囲を異にしつつ、仏性や一乗・三乗などに関する論難が繰り返された。今日明らかになっているだけでも、霊潤、神泰、義栄、基、円測、法宝、慧沼などが「仏性論争」および「一三権実論争（三一権実論争）」に関わったとされる。[51]

要するに、法宝の『一乗仏性究竟論』は、こうした論争史のなかに位置づけられる書物なのである。

以下に、円珍『辟支仏義集』所引の『涅槃疏円指鈔』と『一乗仏性究竟論』の本文を対照したものを掲げる。

『辟支仏義集』下巻[52]

円悟四云、…中略…問、留寿変易行相、如何。答、庶（ホノマヽ）移所発一十三。一無上依経、由無明故有変易。瑜伽、由定願故有留身。二楞伽等、滅法根取変易。瑜伽、留寿有根。三勝鬘、説無明住地資無漏業受変易。瑜伽論、説無漏定願資有漏業受分段身。四依法華経、他仏国受変易身。瑜伽、説即此界中、随所楽住有留寿身。五涅槃、説経八万劫。瑜伽、説留一劫、或劫余。六依勝鬘等、説二乗大力菩薩同受異生身。瑜伽、説大力菩薩如五而生。常化生故。二乗遠離而化生。不定故。七法華智論、非三界摂因縁。非是三界業故。三界煩悩不能繋故。瑜伽、説資二界業引令住故。八楞伽、二乗変易。自為得滅、実入三昧。瑜伽、説因留身、傍入謂滅。

『一乗仏性究竟論』巻第五「増寿変易章第九」[53]

前説増寿後説変易、略有十三不同。一无上依等、由無明住地等有変易生死。瑜伽等、由定願留。二楞伽、滅諸根方取変易。瑜伽、留有根身。三勝鬘无上依等、無明住地資無漏業、別受変易。瑜伽等、定願資有漏業留分段身。四依法華等、往他仏世界。又云、生異仏国。瑜伽等云、於此界贍部洲中随其所楽遠離而住。五涅槃経、是人未来過八万劫住等。依瑜伽論等、即留此身或余一劫。六依勝鬘等経、二乗大力菩薩同受意生身。依瑜伽等、二乗不同大力菩薩。大力菩薩如意而生。常化生故。二乗遠離而住。一切衆生皆不見故。七法華経智論等、非三界摂因縁。非是三有業故。三界煩悩不能繋故。瑜伽等、説三界摂資三界業引令住故。八楞伽等、二乗自謂為滅、実入三昧。瑜伽等、自知留身傍人謂滅。九瑜伽、留身唯不定性。楞伽経等、通於定性。十瑜伽等、留

九瑜伽、留身唯不定性。楞伽経等、通於定性。十唯識、留身通於有学。勝鬘、局羅漢、辟支。十一楞伽経、三昧楽、無益物心。瑜伽論、自知留身遠離為住。十二無上依経仏性論、説要無漏業以為因縁、受変易果趣大菩提。瑜伽、説由無漏定願資有漏業、身時住以最取菩提。十三涅槃経、先入寂滅得発大心。瑜伽論、説先発大心復留身住希。文広者請不辞繁。

身通於有学。勝鬘等、唯阿羅漢、辟支仏、大力菩薩不言有学。十一楞伽等、住三昧楽、変易生中経无量劫、不自覚知。瑜伽等、自知留身遠離而住。十二无上依経仏性論、妄无漏業以為因縁生死。与大菩提為其怨障。瑜伽等、由无漏定資有漏業、身長時住以取菩提。十三涅槃経等、先入寂滅後発大心。瑜伽、先発大心然後留身。准上十三不同、前後意別。成唯識論、雖以无漏業為資身定、然与其義全相乖返。如上十三不同、細読即知違順。

このような本文一致の結果、辯空『涅槃疏円指鈔』の本文は、法宝『一乗仏性究竟論』と密接な関連をもっていることが明瞭となったが、これは法宝の『一乗仏性究竟論』が『涅槃疏円指鈔』を参考にしたと考えるよりも、むしろ『涅槃疏円指鈔』の撰者辯空が『一乗仏性究竟論』の本文に影響を受けたとするのが、これまでの検討に基づく妥当な見方であろう。

また、対照表下段に示した『一乗仏性究竟論』の文は、法宝自身の教時前後説に依拠しながら、前教に『瑜伽師地論』を代表せしめて、後教の『無上依経』『楞伽経』『勝鬘経』『法華経』『涅槃経』などとの不同を十三にわたって述べあらわした箇所である。具体的には、後教経典には変易生死が説かれること、また不定性二乗だけが変易生死を得るのではないことなどが明かされている。[54]

したがって、『涅槃疏円指鈔』に『一乗仏性究竟論』「増寿変易章」の十三不同が引かれるということは、辯空が一乗仏性思想の立場に立っていた一証左となろう。

ところで、法宝の著作には『一乗仏性究竟論』の他にも、北本『涅槃経』を注釈した『大般涅槃経疏』十五巻

（巻九・十のみ現存[55]）があり、そこには浄影寺慧遠の『涅槃経義記』や曇延（五一六―五八八）『涅槃経疏』が多く引用される。[56]また、法宝の『一乗仏性究竟論』にも、慧遠『涅槃経義記』からの本文的な影響があり、[57]彼は布施浩岳博士によって「涅槃学派の論師」、根無一力先生などによって「真諦三蔵（四九九―五六九）の思想に基づく一乗の論師」と見なされている。[58]

これまでの検討からも明らかなように、辯空と自著『涅槃疏円指鈔』をめぐっては、「北本『涅槃経』」「慧遠『涅槃経義記』」「法宝『一乗仏性究竟論』」との関連が明白であるので、彼を「涅槃学派の論師」と呼ぶことには何の問題もないであろう。

他方、唐代の仏性論争および一三権実論争全体を真諦の一乗思想と玄奘の三乗思想に二分できるとした根無先生の見解、所謂辯空が「真諦の思想に基づく一乗の論師」の系統に属するのではないかということについては、以下の目録に挙がる書目が関心を引く。

『法相宗章疏』（九一四）
仏性論疏四巻（辯法師述）　（大正五五・一一三九下）
『東域伝灯目録』
仏性論疏四巻（辯空法師）　（大正五五・一一五八下）
『奈良朝現在一切経疏目録』
仏性論疏　五巻　詧空[59]

巻数の異同に関しては不明としかいえないが、これらの記事を信頼する限り、辯空には『仏性論疏』の著述があったことが知られる。[60]

残念ながら、『仏性論疏』は現在散逸しているが、[61]辯空が真諦の『仏性論』に注釈を加えていることは極めて

興味深く、これは辯空が真諦三蔵の一乗思想に影響を受けていたと見なす一論拠となろう。

辯空の『涅槃疏円指鈔』や『仏性論疏』は、今は存していないし、撰述年時も詳らかでないため、これ以上辯空とその著述に関して内容的に踏み込むことはできない。しかし、これまでの検討により、彼が法宝滅後の長安で一乗仏性説を宣揚した人物であることは疑いない事実であろう。法宝の後にも玄奘の三乗思想を批判したと考えられる一乗家が存在していたのである。

結語

以上、円珍『辟支仏義集』に引用される『円悟』について検討を加えてきた。

従来、『辟支仏義集』所引の『円悟』は、『大日本仏教全書』の校注に従って延秀の『法華円鏡』であると考えられてきた。しかし、『円悟』なる書は、円珍自らが将来した慧遠の『涅槃経義記』の注釈書『涅槃疏円指鈔』であることが明らかとなった。

また、『涅槃疏円指鈔』は辯空法師の著作である可能性が極めて高く、彼は般若三蔵の訳場に身を投じた人物でもある。

さらに、辯空の思想的な立場は、慧遠『涅槃経義記』と関連するだけでなく、北本『涅槃経』、真諦『仏性論』、法宝『一乗仏性究竟論』などとも結び付くことが明らかとなった。

残念ながら、辯空『涅槃疏円指鈔』の引用は円珍を嚆矢とするから、最澄などの著作に引かれることはない。しかし、玄奘の新訳経論とそれに基づいて三乗真実説を唱える人々を意識し、涅槃学派、あるいは真諦の思想に基づく一乗仏性義を論じた辯空が、法宝亡き後の長安仏教界で活躍していたという事実は、『辟支仏義集』に引

かれる典籍や逸文を調査しなければ知り得ないものであった。

円珍『辟支仏義集』は、従来注目されてこなかった人師を浮き彫りにすること、法宝以後においても一三権実論争が継続していたことを示すなど、有益で新たな情報を与えてくれる貴重な書物といえる。

今後は、引き続き『辟支仏義集』に引用される散逸文献の調査をおこなうだけでなく、これまであまり触れられることがなかった法宝や賢首大師法蔵（六四三―七一二）以後の一三権実論争に関する解明をおこなっていきたい。

註

① 昨今、唐代における論争に関しては、霊潤（五八〇―六六七頃）、神泰（生没年未詳）、義栄（生没年未詳）が中心とした問題を「仏性論争」、基（六三二―六八二）、円測（六一三―六九六）、法宝（六二七頃―七〇三～七〇六？）、慧沼（六四九―七一四）が取り扱った問題を「三一権実論争」と呼ぶべきことが指摘されている。詳しくは、伊藤尚徳「唐初仏性論諍の再考察―引用経論の分析から―」（『仏教学』五四、二〇一三年）を参照。

なお、霊潤と法宝の生没年については、順に池田将則「道基の生涯と著作―敦煌出土『雑阿毘曇心章』巻第三（S二七七＋P二七九六）「四善根義」を中心として」（船山徹編『真諦三蔵研究論集』所収、京都大学人文科学研究所、二〇一二年）、根無一力「一乗仏性究竟論の撰述と時代的背景」（『叡山学院研究紀要』九、一九八六年）を参照。

② 『仏書解説大辞典』「辟支仏義集」（大東出版社、一九三五年、第九巻・一七二頁）、浅井円道『上古日本天台本門思想史』（平楽寺書店、一九七三年）、白土わか「『辟支仏義集』管見」（『智証大師研究』所収、同朋舎、一九八九年）、同「智証大師円珍の「辟支仏」観について」（『天台学報』三三、一九九一年）、同「日本仏教における辟支仏についての試論」（『中世文学』四五、二〇〇〇年）、同「辟支仏と日本仏教―その系譜を辿って―」（櫻部建博士喜寿記念論集『初期仏教からアビダルマへ』所収、平楽寺書店、二〇〇二年）、同「日本仏教における辟支仏の問題―受容と展開―」（『仏教学セミナー』七七、二〇〇三年）などを参照。

③ 『辟支仏義集』冒頭の「縁起」には「昔、北轅は四実を讃じ、麃食は一権を謗る。生身爛壊して悪に堕すこと疑い

なし」（旧仏全二六・五八七）とあるので、本書が最澄・徳一論争を継承していることは明らかである。

④ 師茂樹「最澄所引の賓法師の『融文』について」（『東洋大学大学院紀要』三四、一九九八年）を参照。これは、主に最澄『守護国界章』所引の逸文に関して検討をおこなったものであるが、書名や引用範囲が明瞭な『辟支仏義集』の重要性についても論じられている。

⑤ 前川健一「円珍『法華論記』の引用文献―未詳文献の解明を中心に―」（『インド哲学仏教学研究』三、一九九五年）、同「円珍『法華論記』の引用文献―「先覚」と「慈恩」「進公」―」（『印度学仏教学研究』四四（二）、一九九六年）を参照。

⑥ 「悺」の字の右横に「（マン）」とあるが、これは振り仮名としての「マン」なのか、「ママ」の誤写であるのか、今のところ不明としかいえない。そもそも、「悺」の音符は「首」であるから、「シュ」と読むのが普通であろう。

⑦ 大久保良順「六祖門下の文句研究と円鏡について」（『叡山学報』四（通刊二四）、一九六五年）の六八頁。

⑧ 大正五五・一一四八下

⑨ 「見」は「現」の誤りではないかと思われる。

⑩ 円仁『入唐求法巡礼行記』（旧仏全一一三・一八六上）では「僧」となる。

⑪ なお、『法華円鏡』を我が国に将来したのは慈覚大師円仁（七九四―八六四）である。『入唐新求聖教目録』には「法華経円鏡七巻（欠第四六七巻）」「法花円鏡樞決一巻（天長寺釈延秀集）」（大正五五・一〇八三中）などとある。

⑫ 湛然の門下に関する研究は、中里貞隆「荊渓湛然の門下と其著述」（『山家学報』新九、一九三四年）に詳しい。

⑬ 大正三四に収められる湛然の『法華文句記』には「大凡無譬」（大正三四・二五三上）とある。しかし、『天台大師全集』（法華文句の三・一〇六一上、中山書房仏書林、一九八五年）や後世の注釈書では「大九無譬」となっているので、「大凡無譬」は翻刻上の誤りと考えられる。

⑭ 智度と『法華経疏義纘』については、松森秀幸「智度とその著作『天台法華疏義纘』について」（『印度学仏教学研究』五八（二）、二〇一〇年）、同「『天台法華疏義纘』における『法華文句記』批判について」（『印度学仏教学研究』五九（二）、二〇一一年）を参照。

⑮ 智度が述べる「円鏡疏」と湛然や道暹がいう「法華円鏡」「円鏡」が同一書であるかどうかについては不明である。

⑯ 道邃（生没年不詳）の『天台法華疏記義決』巻第三本にもまた「記大九無譬（ト云フハ）者、秀公云（ノク）、為利人（ニ）説大乗九部（ヲ）

無ニ譬喩一経。即其事 也」（旧仏全一五・一六〇下）などとある。大久保良峻博士は、道邃が引く『法華円鏡』の文が全て道邃『法華文句輔正記』などからの孫引きであることを指摘し、これによって『天台法華疏記義決』を含む「三大部要決」の撰者が中国の興道道邃ではなく、日本の播磨道邃であることを論証された。詳しくは、大久保良峻「三大部要決をめぐる一、二の問題」（『天台学報』三三、一九九〇年。のち『天台教学と本覚思想』に収録、法藏館、一九九八年）を参照。

なお、大久保博士は道邃による『法華円鏡』の引用のうち、巻第三末の「秀公云、出体者依二阿毘曇意一、信解有二二体一。信是大善地中信数、解是通大地中慧数」（旧仏全一五・一八〇上）は「吉蔵の『法華義疏』に見られるのであり、『円鏡』との繋がりは求められない」と述べておられる。しかし、後に本文のなかで指摘するように、そもそも『法華円鏡』自体が吉蔵『法華義疏』と本文的な関連をもっているので、この一段だけは道邃や智度からの孫引きでない可能性も残る。けれども、筆者は大久保良峻博士の論旨に異議を挟むつもりはなく、むしろこの主張に賛同する立場に立っていることを銘記しておく。

⑰ 無論、『法華文句輔正記』に引用される『円鏡』のすべてが吉蔵の『法華義疏』と本文的に一致するわけではない。

⑱ 新卍続二八・六八四上

⑲ 大正三四・四八〇中

⑳ 新卍続二八・七一二下

㉑ 大正三四・五一一中

㉒ 新卍続二八・七一二下

㉓ 大正三四・五一一中

㉔ 新卍続二八・八〇六上

㉕ 大正三四・六二六上

㉖ 新卍続二八・八〇九下

㉗ 大正三四・六二八上

㉘ 『法華文句輔正記』に引かれる『法華円鏡』と吉蔵『法華義疏』の本文が関連することは、筆者がここではじめて指摘するものではない。すでに我が国の宝地房証真（一一三一―一二二〇）は『文句私記』の中でそれを暗に示して

いる。証真は「第五不論者、輔引円鏡云、上但序三教、今具述五乗。私云、七異具出嘉祥疏」（旧仏全二二・五八一下）として、道邃の『法華文句輔正記』が『法華円鏡』を引用することを指摘する。そればかりか、証真は「第五不論」が吉蔵『法華義疏』の「七異」（大正三四・五四三下）と関連することを「私云」の中で論じるのである。これは、延秀『法華円鏡』と吉蔵『法華義疏』の本文一致をずばり見抜いたものではないが、『法華文句輔正記』『法華円鏡』『法華義疏』が並び示されていることには注意を要する。もっとも、現行の『法華文句輔正記』巻第六には「第五不論者、上但序三教、今具述五乗」（新卍続一八・七三〇中）とあって、「円鏡」の名は出されていない。

㉙ 吉蔵の『法華義疏』が後世に与えた影響は、慈恩大師基（六三二―六八二）の『法華玄賛』のなかにも顕著である。『法華義疏』と『法華玄賛』の本文的な関連については、末光愛正「『法華玄賛』と『法華義疏』」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』一七、一九八六年）、平井俊榮『法華玄論の註釈的研究』（正、春秋社、一九八七年）、呉鴻燕『湛然『法華五百問論』の研究』（山喜房仏書林、二〇〇七年）などを参照。

㉚ 大正九・四上

㉛『法華経疏』の詳細については、矢吹慶輝『鳴沙餘韻　敦煌出土未伝古逸仏典開宝』（解説篇、岩波書店、一九三三年）の一〇二頁を参照。

㉜ 新卍続一八・七九五中

㉝ 大正八五・一八四下～一八五上

㉞ 旧仏全二六・六三七下や大久保良順「前掲論文」

㉟ 旧仏全二六・六三七下～六三八下

㊱ 大正三七・六一三上

㊲ 旧仏全二六・六三九上

㊳ 大正三七・七二八中～下

㊴ 慧遠の『涅槃経義記』巻第四には「時無多校劫」とあるので、『辟支仏義集』の「時無多劫」は書写者の誤写と思われる。

㊵ 慧遠の『涅槃経義記』巻第四には「障道力強」とあるので、『辟支仏義集』の「都通力強」は書写者の誤写と思わ

れる。

㊶ 他にも、『瑜伽師地論』（六四六―六四八）からの引用が確認される。（旧仏全二六・六三九下）

㊷ なお、『涅槃疏円指鈔』は済暹（一〇二五―一一一五）の『弁顕密二教論懸鏡抄』巻第五に「涅槃経円指」（大正七七・四五九下～四六〇上）として二回引用される。また、安然（八四一―九〇二？―？）の『悉曇蔵』巻第二には「沢州疏」（大正八四・三七八下～三七九上）とあるので、これもおそらくは『涅槃疏円指鈔』のことかと思われる。

㊸ 『新編諸宗教蔵総録』や『義天目録』などとも呼ばれる。

㊹ 白川静『字通』（平凡社、一九九六年）の六五二頁。

㊺ 無論、『涅槃疏円指鈔』十巻も『円旨鈔』十四巻も、現在散逸して披閲することはできない。

㊻ 『仏書解説大辞典』の「涅槃経義記円旨抄」（一九三四年、第八巻・四〇四頁）の項目には、「大正新脩大蔵経続刊予定書目」とあるが、現在のところ所蔵先や存否については未詳である。また、「涅槃疏円指鈔」（第八巻・四一〇頁）の項目では「習空の涅槃経義記円旨抄のことか」とある。

㊼ 『宋高僧伝』巻第一四の「智慧伝」には「辯空」（大正五〇・七一六中）とある。また、円照の『大唐貞元続元釈教録』（七九四）の巻上や同『貞元新定釈教目録』（八〇〇）の巻第一七では「晉空」（大正五五・七五六中や八九二上）となる。

㊽ 円照『大唐貞元続元釈教録』の巻上（大正五五・七五六中）や同『貞元新定釈教目録』の巻第一七（大正五五・八九二上～中）を参照。また、般若三蔵をめぐる翻訳事業、とりわけ『大乗理趣六波羅蜜多経』に注目して、中央ユーラシア圏内における政治・社会の動向を解明した有益な研究成果もある。（中田美絵「八世紀後半における中央ユーラシアの動向と長安仏教界―徳宗期『大乗理趣六波羅蜜多経』翻訳参加者の分析より―」、『関西大学東西学術研究所紀要』四四、二〇一一年）

㊾ 『一乗仏性究竟論』は、現在、巻三のみが新卍続の巻五五に収められている。しかしながら、昭和六十一年、淺田正博博士によって巻一・二・四・五が石山寺から発見され、本書の全貌がほぼ窺い知れるようになった。その翻刻資料については、淺田正博「石山寺所蔵『一乗仏性究竟論』巻第一・巻第二の検出について」（『龍谷大学論集』四二九、一九八六年）、同「法宝撰『一乗仏性究竟論』巻第四・第五の両巻について」（『仏教文化研究所紀要』二五、一九八六年）を参照されたい。なお、本稿で使用する『一乗仏性究竟論』の本文は、淺田博士の前掲論文に翻刻されている

ものを使用する。また、出拠の表記は淺田博士の論文の頁数と翻刻行数に基づく。

⑩ 根無一力「前掲論文」を参照

⑪ この分野に関する主な研究成果としては、常盤大定『仏性の研究』（丙午出版社、一九三〇年。国書刊行会、一九七三年再版）、富貴原章信『中国日本仏性思想史』（国書刊行会、一九八八年）、田村晃祐「最澄『法華秀句』中巻について」（『東洋大学文学部紀要』三三、一九八〇年）、吉村誠『中国唯識思想史研究—玄奘と唯識学派—』（大蔵出版、二〇一三年）などがある。

⑫ 旧仏全二六・六四〇上～下

⑬『仏教文化研究所紀要』二五・一三七の192～一三八の217

⑭ 詳しくは、寺井良宣「法宝の唯識思想批判の考察—変易生死と二乗作仏の問題を中心に—」（『仏教学研究』四八、一九九二年）を参照。

⑮ 大正十一（一九二二）年、朝鮮総督府事務官を務めていた小田省吾氏によって韓国・松広寺から発見され、現在は『大般涅槃経疏（玻璃版）』（朝鮮総督府、大正十三年六月）として出版されている。

⑯ 木村宣彰「法宝における涅槃経解釈の特質」（『大谷学報』五八（一）、一九七八年。のち『中国仏教思想研究』に収録、法蔵館、二〇〇九年）

⑰ 小野嶋祥雄「法宝撰『一乗仏性究竟論』の基底—特に浄影寺慧遠の思想と対比して—」（『印度学仏教学研究』六〇（一）、二〇一一年）

⑱ 布施浩岳『涅槃宗の研究』（後篇、国書刊行会、一九七三年）、根無一力「前掲論文」、小野嶋祥雄「『真諦系一乗家』としての『一乗仏性究竟論』」（『印度学仏教学研究』六一（一）、二〇一二年）を参照。

⑲ 石田茂作『奈良朝現在一切経疏目録』（『写経より見たる奈良朝仏教の研究』附録、東洋文庫、一九三〇年）の一二八頁。

⑳『仏性論』の注釈書について、『仏書解説大辞典』（第九巻・二九七頁）、『国訳一切経』「瑜伽部一一」（坂本幸男訳、大東出版社、一九三五年、二六七頁）、田村晃祐「前掲論文」（三六頁）などでは以下のように報告される。

仏性論疏　四（或五）巻　弁（空）法師
仏性論義　一巻　唐　勝荘

仏性論疏　三巻　恵証
仏性論疏　四巻　習空
仏性論疏　五巻　神泰
仏性論節義　四巻　日本　賢州

本稿で指摘したように、右の「弁〔空〕」と「習空」は同一人物と考えられるから、現在伝えられる『仏性論』の注釈書は計五種となる。また、辯空に『仏性論疏』の著述があることを指摘したものには、他に結城令聞『唯識学典籍志』（『東洋文化研究所紀要』別冊、大蔵出版、一九六二年、四〇七頁）がある。

(61) 他にも、辯空には『因明入正理論義冀』三巻の著作があったことが『東域伝灯目録』（大正五五・一一六〇上）に挙がっている。

キーワード　真諦、慧遠、延秀、法宝、辯空、円珍、『涅槃経義記』、『法華円鏡』、『一乗仏性究竟論』、『涅槃疏円指鈔』、『辟支仏義集』